



第七十八號 (第七卷) 昭和二年九月號

キムネケ彗星を送る

(卷頭言)

今年度の珍客キムネケ彗星は既に往つて了つた。去る三月の始め、北米のダンバー教授に発見されて以來、七月中旬ごろ南天の鳳凰座に消え去るまでの前後5ヶ月足らずの間、我が國は言ふに及ばず、世界を擧げて、學俗一般の異常なる興味を集め、暫らくは、ジュネーヴ市の軍縮會議をも忘れて、人が皆此の天空を見張つた一事は、平素余りに人間臭い社會の空氣を、涼風一過、心地好く掃ひ去つたかの感がある。此の如きは餘さき「天文の功德」として吾人が常に稱へる理由の一例である。

キムネケ彗星の學的觀測も可なり善く行はれた。尤も、今は未だ外國の觀測結果を手にする時機に達しないけれど、少なくとも我が國に於いては、奉天や札幌に出張した觀測者の成績は言ふも更なり、京都や東京其の他に於いても、雨期に雨の少なかつた僥倖を利用して、豫期以上の美事な記録が作られたことは慶賀に堪へない。觀測の結果取り敢へず、(1)彗星の光輝が大きかつたこと、(2)明らかに尾が認められ、日の進むと共に其れが複雑な變化發達を見せたこと、(3)星の頭部の物理構造が明白にせられたこと、(4)意外にも鋭い中心核の位置觀測によつて太陽視差決定の珍しい材料が獲られたこと、(5)彗星の軌道要素が極めて確實に定められたこと、(6)彗星の光輝が太陽や地球との距離と如何に關係するかが明らかになつたこと、(7)彗星と關連する流星群中に可なりの大流星が認められたこと、(8)奉天に於いて稀有の一大流星が眼視的にも寫眞的にも完全に觀測されたこと——此の八點を特筆することが出来る。

しかし、今にして顧へば残念なことも無いではない。即ち前掲の(4)は多分諸外國の天文臺に於いて特に優秀な收穫が得られたらしいのであつて、我が國の觀測者等が此の點に充分活動することが出来なかつたのは、費用不足のため、雨の無い滿洲と北海道とに大寫眞機と大觀測隊を送ることが不可能であつたに由る。實に千載の恨みである。

此の星の機會に、我が國內に於ける天文臺や望遠鏡の地理的分布が如何に大切なものであるかが示されたのは、學の將來のための好資料である。之れに鑑みて、將來は益々、望遠鏡を「東京や京都に集中する」ことを避け、實に全國に完全な「天文網」を張るのみならず、餘裕あれば進んで支那やブラジルにも出張所を設けることを理想としなければならない。